

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生高学年の部 優秀賞

## 母の大切さとは

旭丘小学校五年

津田つだ

瑚晏こはる

私はとても母が大好きだ。大切だ。二年生までの自分はその言葉に深い意味はなかった。しかし、二年生からの自分はこの言葉にとっても意味があることを実感していった。

夏休みの一人一作品という宿題があった。今まで一人一作品の中でできるこ目は、自由研究、科学研究、そして工作だった。でも、今年からは、工作のかわりに、母へのおもいの作文があった。私はすぐこの作品にしようと思った。それに意外と私は作文を書くことが得意だったし、好きだったからこの作品にしようと思った。母には「自由研究じゃなくていいの？」と聞かれたが、私は迷いなく、「この作品がいいの。」と答えた。そのとき、母はにっこりと笑みをうかべていた。

母の大切さを知るきっかけとなったのは、私が二年生の時だった。一年生の時、大好きなおじいちゃんやなくなりとても悲しんでいた。しかしなくなつてから数カ月たったある日、なんとママのおなかの中にたまごができていたのだ。父と母ととても喜んだ。そのときは喜びしかなかった。だが五カ月ごろがすぎると、まだ小さかった私は、「弟に母をとられてしまつて、自分は母にあまえられないのでは？」と思い始めた。少し不安もあつたけれど、母といっしょに、赤ちゃんの本を見たり、赤ちゃんグッズを見たりと期待しても、さらに高まつていた。

病院の先生が母に赤ちゃんの性別を教えてくださいました。性別は男だった。母も父もおばあちゃんも、みんな喜んでいました。正直私は妹がよかったのだが…。

出産の一日前。家族三人で夕食をした。三人だけの時間は、この日が最後だった。食べている時、しゃべっていなくても、すごく幸せだった。いつもより、ごはんが百倍おいしかった。

夕方母を病院へ見送りに行った。すごくさみしくて、悲しかったけど、母がいる時には泣くのをがまんした。母に心配してほしくなかったから。でも、車に入ったしゅん間に泣きだした。大泣きした。三十分くらいずっと泣き続けていた。

喜びも不安も期たいもさびしさも、いろいろあつた十月。ようやく

私の弟が産まれてきてくれるとき、まちにまつた日。弟が産まれたのは二〇一三年十月七日、七時ごろだった。きょうだいほしいと思いつけて四年。ようやく私にもきょうだいできたのだ。今まで友達にきょうだいの話をされて、うらやましがっていた自分だが、これからは自分もきょうだいの話ができるのだと思つたら、心がとてもわくわくしてきた。二週間後、ようやく母と弟が家へもどつてきた。そして大好きな母に「弟を産んでくれてありがとう。私を産んでくれてありがとう。」と言つた。

こんなに新しい家族で幸せだったはずなのに、母は弟につきつきり。出産する前に私が思つていた不安な予想は当たつていたので。私は弟ではなく母にかつとなり前より母とたくさんけんかするようになった。そのときの私は、気持ち不安定で今でも、「何で自分は、母にあんないやなことをしてしまつたんだろう」と思うときがあるほど、おかしくなつていたので。でも、母は私にやさしく接してくれて、二人の時間をつくつてくれていた。弟のことでいそがしいはずなのに私を大切に、大切にしてくれていたのだ。気持ちも落ち着いて、「母と協力しないと」と思い、自分は母に失礼なことをしてたとそのとき気づいた。

私は母が大好きだ。大切だ。この言葉にこめられた意味とは、どんなにけんかして、ぶつかり合つても、大好きだよ。私は母に大切にされてきた。だから私も母を大切に、たくさん協力するよ。という意味だと思ふ。

今は、弟が産まれてから、三年がたつ。もうこの生活には、もちろんなれている。そして、この間、新しいこが産まれた。これからが本当に楽しみだ。

私はこの経験から、今まで以上に、母のことをもっと大好きになろう。大切にしよう。と思つた。母だけでなく、家族みんなを大切にしていこうと思つた。